日本バプテスト連盟

性差別問題特別委員会

ニュースレター第40号　2025．10．15

★日本バプテスト連盟のホームページでも読むことができます。

巻頭言：してほしいこと？

今給黎眞弓

人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。（ルカによる福音書6章31節　新共同訳聖書）

「マコ9：23」という表記を見てどう読みますか。私は当然のように「マルコによる福音書9章23節」と理解しました。しかし、教会に初めて来られる方は「マコ9時23分」と読むだろうというのです（ある集会にて）。教会用語や週報にあたりまえのように書かれている言葉について、性差別の視点での疑問はこれまでも持っていたのですが、「9時23分」は新鮮でした。当然のように使っている言葉が、人によっては意味不明であったり、傷つける言葉であったり、なんとなくいやな気分になるようなものが、こちら側が意図しないのにあふれています。それどころか良かれと思ったことが相手を傷つけることもあります。自分が意識していないので、そんなことに気づけるのは、まったく違った感覚に出会う時です。

イエスが、人にしてほしいことを人にもしなさいと言われたのは、「私は」こうされて嬉しかった、これが楽しかったから人にもしよう、という事ではないのではと思います。それよりも人にしてもらいたいことは、「それを私におしつけないで」「私のことは私に決めさせて」ということではないかと思うのです。私たちは、だれでも自己決定権を持ちます。自分が何者であり、どのように生きるかを悩み、選び、決定することができます。それは大切にされなければなりません。相手をそのような尊厳を持つひとりの人として向き合い、聞く事です。特にセクシュアリティに関することは表面に現れにくいものです。安心できる相手、場でないと話題に上りません。そのため知らず知らずの言動が相手を傷つけ、声を出させ無くしてしまうことがあります。人との関わりの中では、間違いや衝突が起きることは避けられません。起きたら、立ち止まって考える良い機会です（逆に衝突がおきないのは、相手が黙り込んでいるだけかもしれません）。自分の閉鎖性や差別性に気づかされたら方向転換（悔い改め）の道が開かれます。そして知ろうとします。相手を大切にしつつ、自分を大切にしていく道を探っていきます。それがなかなか難しいのですが。だからこそ「そうしなさい」と招かれています。面倒だから避けるのではなく、無難にすごすのではなく。

教会では、「みんなたいせつないのち」と言います。そのことを体現する場でありたいと願っています。いやな時に、「いや」と言えているでしょうか。

（いまぎれ　まゆみ／性差別問題特別委員会委員　豊中バプテスト教会）

2025 年度 西南学院大学神学部の授業担当

今井朋恵

「戦争は差別からはじまる」ある人の書き込みに目が止まりました。差別には、「他よりも不当に低く取り扱う」という意味があります。終わらない戦争の中で餓死する子どもたち、生活の場を求め移動する人たちに、私たちは何を思うのでしょう。日本は敗戦から 80 年、安保関連法案の成立から 10 年、連帯を危うくする排外主義が叫ばれる今、思考停止の暇(いとま)はありません。

2025 年度、当委員会担当の西南学院大学神学部実践神学 B が始まりました。委員会の授業担当は 3 回目です。今回は、オムニバス形式にて対面とネットを組み合わせ、複数人で 14 コマ担当します。複数にするのは、力の集中を避け、個々の語りを届けるためです。私たち委員会が、日頃から大切にしていることは、よく話し合うことです。委員会の文書作成には、一定の時間をかけ修正を繰り返します。様々な意見を取り入れ、全体を整えることが目標であり喜びです。授業の準備も打ち合わせを行い、レジュメを共有します。

また、委員会内で心がけていることは、平らな関係性です。プライバシーに関わるもの以外の情報を共有し、互いを○○さんと呼び合います。牧師や長が情報を持つ、情報量からくる力の不均衡を是正し、同じ地平で話し合います。牧師は先生、他の人を○○さんと呼ぶのは？小さな疑問から意識や行動を変えていきます。民主的で平らな関係性は、安全な場となるためです。

役職に就く人、牧師、教師は、力を持っています。その自覚と共に、周囲の人が過度に持ち上げないことです。誰しも錯覚に陥り、権限の行使拡大に至る可能性があります。力の乱用は、パワハラ等へ繋がり被害者を作り出します。

神学校で学ぶ学生が、牧師や働き人になり教会に仕える、或いは社会の中でリーダーとなる可能性は大きいと思います。どんなに能力があっても、人を尊重せず人を大切にできない人は、社会的にも困難な状況になるでしょう。そこで、性差別の学びに入る前に「人権・差別・教会」というテーマを 1 コマ設けました。全ての人に与えられている人権がどのようなものであるのかを知り、差別の真の怖さを歴史から学び、更に社会の中にある教会の役割、使命を考えました。「いつでもどこでもだれでも同じ人権」をベースに進めていきます。

私たちが答えを持っている訳ではありません。教えるのではなく一緒に考えます。自分の頭で考える大切さを語り、一人ひとりが感じ取ることを大事にしていきます。学びを通じ自らを知り、「クリティカル・フレンド(批判もする友達) :『武器としての国際人権』藤田早苗」を歓迎し、他者の痛みを知り喜びを共感する柔軟性が与えられますように。性差別は些細なことではなく、人の人生やいのちを左右する重大なことであると、共に学んでいきます。学びの空間が、公平で穏やかであるように祈ります。

（いまい　ともえ／性差別問題特別委員会委員　今治バプテスト教会）

信徒活動について

福田雅祥

当教会の信徒活動について原稿依頼を受けました。私が牧師として赴任した１９９９年当時は、教会員が十数名で、いわゆる女性会、壮年会、青年会といった信徒活動の各会はありませんでした。その後、教会員が増えてくると「各会を作っては」という声もありました。しかし、私は、「信徒活動を性別や年齢によってグループ分けする必要が果たしてあるのか」と思っていましたので、それを教会員と共有しながら、「当教会は各会を作らない（信徒活動を性別や年齢によって分けない）」、「信徒活動は基本的にみんなで行う」、「ただし連盟や連合、全国女性連合や全国壮年会連合とのつながりは大切にする」という方針を決め、２０年以上が経過しました。

この間、様々なところから「函館美原には〇〇会がまだないの？」といったような声を度々うかがってきました。応答の機会があれば、「『ない』のではなく『作らない』のです」とお伝えして、説明もしてきました。しかし、最近は、そのような声もほとんど聞くことがなくなり、むしろ、性別によって分けられた信徒活動について、様々な議論が起こっているように思います。

信徒活動を性別や年齢によって分けずに教会形成をしてきた中で、いくつかの課題もまたあります。例えば、当教会に各会がなくても、連盟や連合、全国女性連合や全国壮年会連合からは、様々な集会や活動の案内、総会や選挙の通知などが結構な頻度できます。そのようなつながりをなくすれば問題はないのかも知れませんが、当教会は、「連盟や連合、全国女性連合や全国壮年会連合とのつながりは大切にする」ことを方針にしてきましたので、各会はなくとも対外的な窓口を置いてきました。その窓口が「執事会」で一手に窓口業務を担っています。しかし、執事会は、これにかなりの時間と労力を割かれています。特に今年度は、連合女性信徒の会の役員について、各教会がなかなか候補者擁立をできなかったため、結局、当教会から会長を送り出すことになりました。これもまた執事が担っています。しかし、各会がない当教会から連合女性信徒の会の責任者を出すのは、やはり不自然なことで違和感もあります。

そのような意味で、私たちは皆、大きな曲がり角に立っているのだと思います。それは、ジェンダーフリーを実現していくために通らなければならない道なのかも知れません。一つひとつ知恵を出し合いながら、みんなが喜んで参加できる信徒活動が形作られていくことを願っています。

（ふくだ　まさよし／函館美原キリスト教会）

映画の感想

吉田尚志

「教皇選挙」（2024 年/アメリカ・イギリス）という映画を観ました。第 97 回アカデミー賞で、脚色賞を受賞した作品です。舞台はバチカン。ローマ教皇の帰天に伴い、世界各地から新教皇の候補者である枢機卿たちが集められ、教皇選挙（コンクラーベ）がシスティーナ礼拝堂で行われます。選挙は、3 分の 2 以上の得票数による当選者が決定するまで、日をまた

ぎながら繰り返し執行されていき、その中で登場人物たちの様々な思いが交錯していきます。教皇選挙（コンクラーベ）が執り行われる描写は、カトリック教会の歴史の一端を垣間見るようで大変興味深いものがありました。また、異なる思想・信条からなる争い、権力や名誉に対する執着、保身や利得のための迎合、聖職者による性加害、ジェンダー格差、セクシュアルマイノリティへの偏見や差別等、教皇選挙（コンクラーベ）という事柄を通して浮き彫りにされる諸問題が、カトリック教会のみならず、すべての教会にとって他人ごとではない、“私たち自身の問題”であることを、あらためて痛感させられる思いでした。

本編にあった印象的なセリフから一つご紹介いたします。

「人間や考え方の多様性が我々の教会に力を与えます。私は長年教会にお仕えしてきて、何より恐れるようになった罪が一つあります。“確信”です。確信は一致を阻む敵であり、寛容の大敵でもあります。キリストでさえ最期に、“神よ、なぜ私をお見捨てに？” 確信を持てず十字架の上で叫びました。信仰は生き物です。疑念と手を取り合い歩むものだ。もし確信だけで疑念を抱かねば、不可解なことは消え、信仰は必要なくなる。」

セリフの中で、“確信”と“疑念”のことが語られています。それは“絶対化”と“問い”のことではないかと思います。自分であろうと、他者であろうと、他の何ものであろうと、何かを絶対化することはある意味では“ラク”なことかもしれません。しかし、それがもたらしてしまうのは、違いあるものに対する敵意や憎しみであり、差別や争いや分断ではないでしょうか？“問う”ことは、一人ひとりをそのような“絶対化”に陥ることから解放し、神が創造された違いのある互いの“いのち”を、かけがえのない存在として認め合う歩みに向かわせる大切な、思考であり祈りだと考えます。

ご興味のある方は是非一度、ご覧になってみてはいかがでしょうか。

（よしだ　なおし／性差別問題特別委員会委員 室蘭バプテスト・キリスト教会）

編集後記：

西南学院大学神学部に在籍していた頃、京都にある日本バプテスト病院で行われた「臨床牧会実習」に参加した。実習の中で特に印象深かった学びの一つに、妊婦・高齢者体験があった。上半身に約 10kg はあるかと思われる重りを身につけ、膝を曲げ難くし、視界を狭くし、音を聴こえ難くする様々な器機を装着することで初めて、妊婦や高齢者の抱える身体的不自由さや精神的ストレスを実感させられた。神学部のカリキュラムによるこの学びの機会は、自分の基準に囚われ、他者の痛みや気持ちを顧みることが出来ずに過ごしてきたことに気づかされる得難い経験となった。“自分の閉鎖性や差別性に気づかされたら方向転換（悔い改め）の道が開かれます。そして知ろうとします。相手を大切にしつつ、自分を大切にしていく道を探っていきます。それがなかなか難しいのですが。だからこそ「そうしなさい」と招かれています”（巻頭言）。

互いの“いのち”を尊び合う関係へと招くイエスさまの言葉は、自分とは異なる指向を持ち、自分とは異なる状況におかれた他者の存在がいることを認めながら、その他者の痛みや喜びを知り、共感しようとする歩みのなかで実現されていくのではないでしょうか。

最後に、4 面で紹介した映画の本編から、印象深かったもう一つのセリフを紹介いたします。

“私は確信に満ちた世界のはざまで生きている者です”

（よしだ　なおし／性差別問題特別委員会委員 室蘭バプテスト・キリスト教会）